

카
스
테
라

この冷蔵庫は前世で、フリーガンだったのだろう。

そうに違いないと、僕は思ってる。一九八五年五月、ベルギー・ブリュッセル、リヴァプール vs. ユベントスのヨーロッパチャンピオンズカップ決勝戦で、興奮したイギリス人のサポーターがイタリア人の応援席に向かって突進、スタンドが崩れ、三十九人が下敷きになって死亡した。この男はその中にいたんだ。

奴が正気に返ったときは、もう天国だったというわけ。マジかよ！ 当然のことながら取り返しのつかない後悔が押し寄せてくる。頭を冷やさなくちゃ！ 頭を冷やすにはどうすれば！ そんな彼に神様が言った、「じゃあ、冷蔵庫になるなんてどうだ？」。なるほど！ とそいつは膝を打った、それは生きがいのある人生だろうなと。そういうわけで、リヴァプールチームを愛してやまなかつ

た一人の男は冷蔵庫に生まれ変わり、めぐりめぐって僕のところに来てきた。僕はそう信じてる。誰が、何と言っても。

今でも僕はときどき、こいつとの初夜を思い出す。

ほんとうにひどい夜だった。初めはうるさいなあという程度だったが、このままじゃ爆発するのでは？ と恐ろしくなり、どうしても眠れなくなり。ウーン……ウーン……という、工場一棟に匹敵するほどの騒音を一台の冷蔵庫が発している光景は、みっともないといえばみっともないし、壮観ともいえ、おそろおそろ冷蔵庫の扉に耳をつけてみると、猛烈な勢いでマグマのようなものがわきかえる音をする。僕はすぐさま冷蔵庫のコードを引き抜いた。中には缶ビールが六本と巨大な容器入りのキムチ、夕方に食べたくるみアイスの残りが入っていた。蒸し暑い夏の夜だった。

よくまあこんなものを売りつける気になれたもんだ。崩れたスタンドの下敷きになって死んだイタリア人サポーターと同じぐらい、僕は腹立たしく、悔しかった。今すぐあのけしからんリサイクルショップにかけつけて、シャッターをぶっ壊してやろうかと思っただけで、それより先にやるべきことがあった。溶ける前になるみアイスを食べなくちゃならない。そしてついには寝そびれ、くすみのにおいのする下痢までしたあげく、翌日の午後にやっとリサイクルショップに行ってみると、固く閉まったシャッターには「修理中」という張り紙がしてあった。

部屋に戻るともう、かすかなキムチのにおいが部屋中に充滿している。もう、知るもんか！ 酸っぱいにおいのせいで自暴自棄になったかして、僕はつい、冷蔵庫のコードを差し込んでしまった。ウーン……ウーン……フリーガンが押し寄せてくるような猛烈な騒音が再び、四方の壁をゆるがし始める。よりによってなぜ僕にこんなことが！ と思った瞬間、不運すぎた僕の前世がさっと目の前をかすめて通り過ぎたような気がする。もしかして僕は、ユベントスを応援していて不意にとんでもない目にあつた、あの気の毒なイタリア人だったのかもしれない。

2

前世はさておき——僕は結局、この冷蔵庫と一緒に二年以上暮らしてきた。お話にならないと思うかもしれないけど、これはどうしようもない事実。そうなった理由の一つはあのけしからんリサイクルショップがほんとうにつぶれてしまったことで、もう一つは、一緒に暮らしているうちに冷蔵庫がさほど苦にならなくなってきたということだ。その上、あいつはとんでもなく頑丈だったし、ほんとに苦にならなかったのかって？

ほんとに、そうだった。

むしろ、ひとり暮らしの僕としては、あのすさまじい騒音のおかげで寂しさがまぎれたといえるぐらいだった。僕だって人間だ。人間って結局、何にでも慣れてしまう。冷蔵庫と僕が出会つたのは大学生になって間もない一年生の夏休みで、かつて経験したことのないほど不快指数の高い夏だったことを憶えてる。家族に対して多くの不満をかかえていた僕は、大学の近くでもかくにも自炊生活を始め、狭くらしい部屋で冷蔵庫、テレビ、ミニオーディオと一緒に仲良く暮らしていたのだが、実際には僕と冷蔵庫だけが暮らしていたような気がする。冷蔵庫の騒音があまりにも際立っていたから。

大学の正門から、険しい坂道を三百メートルぐらい上つたところにあるこのワンルームには、そのせいで誰もやってこなかった。ちょうど夏休みで、もう一度言うがかつて経験したことのない不快指数の高い夏だった。行きつけの居酒屋「坂の上のビアホール」のマスターは僕と同じ考えで、坂道といつてもこんなにきれいに舗装してあるのに、どうして誰も来てくれないんだろうね？ と、よくこぼしていたつけ。そうですねえ、何ででしょうかね？ と相づちを打ちながら、僕はたくましくなったふくらはぎをさすったり、ピーナツをつまんだりしていた。不快指数が高かろうが低かろうが、誰もやってこない夏だった。

そして僕はいつも、不愉快なまでに寂しかった。

僕が冷蔵庫と友だちになったわけといたら、そんな感じ。あらためていうが、あのすさまじい騒音のおかげで僕は寂しさを忘れることができたのだ。誰もやってこないあのワンルームで二人きり。世間によくあるように、冷蔵庫もつきあってみたらいい奴だった。つきあってみると悪い人間はいないものだ。

驚くべきことだが、一九二六年にゼネラル・エレクトリック社が世界初の現代式冷蔵庫を発売して以来、人間と冷蔵庫が友だちになったケースはこれが初めてだったのだ。僕が世界初だなんて！ 人類はいつたい、どれだけ冷蔵庫を冷遇してきたのか。はたしてこの世の中に、冷蔵庫の存在価値をきちんとわきまえた人間がいるのだろうか。僕らはとかく、この広い世界に生きているのは人間だけだと思いきみがちだ。しかし、少しでも周囲に注意を向ければ、自分のすぐそばに冷蔵庫がいることに気づく。

冷蔵庫は一個の人格なのだ。

さあ、それではあの音に耳を澄ますんだ。そして感じてみるんだ、コンプレッサーとコンデンサー、蒸発器と熱交換器を循環するあの流れを、奇跡のサイクルを。僕が冷蔵庫に魅了されたのは、あの循環音に目覚めてからのことだ。もちろん最初は違ったのだ、僕もまた、「冷蔵の世界？ 何そ

れ」って感じの普通の人間の一人にすぎなかったから。きつかけは、あのすさまじい騒音をどうにかしたいという素朴な意思だった。今振り返ってみればかばかしい行為だが、僕はメーカーに電話して、迅速かつ正確なアフターサービスを依頼した。言い訳なんかじゃなく、たぶん誰だってそうしただろうと思う。

迅速かつ正確なはずのアフターサービスは、しかし、だらだらと長引いた。除霜ヒーターの点検から各種部品の交換、おしまいには毛細管の掃除まで。八月初旬の蒸し蒸しする午後の作業が続く、部屋は散らかりっぱなし。結局、修理担当者は四回も僕の部屋にやってきて、修理が終わるたびに違うことを言った。最初は「もう大丈夫ですよ」、二回目は「おかしいなあ」、三回目は「買い替えたほうがいいと思いますけどね」、四回目は、ほとんど聞こえないくらいの死にそうな声で「もう、やっつけられなう」。

騒音は全然おさまらなかった。

ようやく二学期が始まったが、決して気持ち晴れなかった。そして僕は冷蔵庫の原理、構造、そして冷蔵の歴史について学び始めた——まるで、ラジオをばらばらに分解した後、組み立てられなくなっただつ男の子みたいだ。

奇妙なことだが、僕は思いのほか冷蔵の世界というものに魅せられていった。文字通りの興味津々。僕はますます学校をサボるようになり、たまに洗濯物を抱えて帰っていた実家からも、いつの間にか足が遠のいていった。何て言えばいいんだろう、「冷蔵の世界？ 何それ」的なまばゆい日常を闊歩していて、不意にマンホールの中に落ちてしまったような気分だった。

そこでは、暗く、謎めいた、うすら寒い冷蔵の世界がくり広げられていた。僕は四六時中、一筋のフロンガスのように地下世界の毛細管の中をさまよい、夜になるとまぶしい一握りの霜になり、地下の壁の一隅にへばりついて浅い眠りをむさぼった。出口を見つけたときは——上がってきてからわかったことだが——秋ももう終わりにかけていた。まぶしかった。そして

地上の風景はすっかり変わっていた。

3

まる一週間、冷蔵庫にかかりきりだったのだと思う。精密な診断を終え、ありとあらゆる可能性を考慮して修理に熱中したのだが、それでも騒音はおさまらなかつた。アフターサービスの担当者同様、どうやっても原因がわからない。これでは、「もう買い替えちゃおうか？」とか、「やってら

れない」と思うのも無理のないなりゆきだった。けれど、冷蔵の世界を理解し始めていた僕は、アフターサービス担当者とはまったく異なる視点でこの問題を解釈していた。それは

この冷蔵庫は強力な発言権を持っている

ということだった。そうだ、フリーガンの生まれ変わりであるこの冷蔵庫は、人一倍強い発言権を持って生まれてきたのだ。ひよっとするともものすぐく声が大きくて、タフな性格の持ち主だったのかもしれない。リヴァプール vs ユベントスの決勝戦で、「やっちなまえ！」と叫んで騒動を扇動した人物は、間違いなくこいつだったのだろう。僕はそう思う、誰が何と言おうとも。かっこいいじゃないか、

「やっちなまえ！」だなんて。

だって冷蔵の歴史は、腐敗との闘争だったのだから。

人類は太古の昔から、食べ物を低温で保存すれば長持ちするということを知っていた。中国人はすでに紀元前一千年ごろ、地下室と氷を利用した原始的な冷蔵技術を持っていた。あえていうなら、人類初の冷蔵庫は土の中——つまり、地球だったわけだ。